



女子教育を 推進する

学校に行けない学童期の子どもたちの数は1億2,100万人あまり。その大半が女の子。本来開花されるであろう子どもたちの才能が、計り知れないほど多く失われていることになる。2003年度、ユニセフは特に女子教育に力を入れ、女の子を学校に入学させ、学校に留める努力を続け、すべての子どもが質の高い初等教育を修了する権利を享受できるよう努力した。

ユニセフは2億3,300万米ドルを女子教育の推進のために支出し、被支援国がミレニアム開発目標のうちの2つの教育目標——2005年までにジェンダーの格差をなくす、2015年までにすべての人が初等教育を受けられるようになる——を達成できるよう支援した。今の進展具合で行くと、南アジアは2020年以前にすべての人に初等教育を提供することはできず、アラブの国々も2050年までにこれを実現することはできない。そして、サハラ以南のアフリカの国々は、よほどの努力をしない限り、小学校に通うべき年齢になった子どもたちを小学校に通わせるという目標を、次の世紀に入ってからかなり経たないと実現することができない。

教室のドアを開放する

ユニセフは国、ドナー政府、国連機関と協働で、「アフリカの女子教育イニシアティブ」を積極的に支援している。これは34カ国で教育の質を高め、ジェンダーの格差をなくそうというものである。このイニシアティブはノルウェー政府などにより資金拠出され、武力紛争の影響を受けている国やHIV/エイズの影響を受けている国を支援している。

さらに、ユニセフは「2005年までに25カ国を」というキャンペーンを強化している。これは、教育におけるジェンダー

の平等を目指す運動を25カ国で積極的に推進しようとする戦略で、2002年にスタートしている。女子の就学率が低い国、初等教育でのジェンダーの格差が10%以上開いているところ、学校に行けない女子が100万人以上いる国、世界銀行の「万人のための教育：ファスト・トラック・イニシアティブ」の対象国、あるいはHIV/エイズや武力紛争で打撃を受けている国を重点的に支援するものである。アフガニスタンから、ボリビア、エリトリア、パプア・ニューギニア、イエメンなど、ありとあらゆる国々で、ユニセフはアドボカシー、金銭支援、問題解決、パートナーシップなどの面で、地域のコミュニティや国の役人たちとともに努力している。

ユニセフは、「万人のための教育」でUNESCO（ユネスコ）と協調し、世界銀行の「ファスト・トラック・イニシアティブ」にも寄与している。ユニセフはさらに、教育面でのジェンダーの格差解消のため、13の国連機関がチームとなって参加している「国連女子教育イニシアティブ」の先頭に立っている。

アウトリーチと行動

ユニセフは、女子教育の面で、全世界、地域、国家レベルで、高レベルな政治的行動を引き出すことに成功した。

「2005年までに25カ国を」の拡大キャンペーンとして、「がんばれ女の子たち！すべての子どもに教育を」を、フォックス・キッズと協働で、2003年国際フォックス・キッズ・カップ・トーナメントの中で開催した。アルゼンチン、ブルガリア、グルジア、パナマ、ルーマニア、トルコの13歳未満の女の子と男の子が、全国サッカー・トーナメントで闘い、女子教育についてのメッセージをそのはしばしで広めた。国

際サッカー連盟（FIFA）は2003年女子ワールド・カップをユニセフと、「がんばれ女の子たち！」キャンペーンのために捧げた。FIFAは、インターネット、ビデオ、出版物、スタジアムでのアナウンスを通して、女子教育の大切さについて訴えたのである。さらに、女子のスポーツ参加を促進するために600の「スポーツ・イン・ア・ボックス」（スポーツ用具を箱につめたキット）を寄付した。

「教育のためのグローバル・キャンペーン」は「『女子教育』：今までで最大の授業」を開催した。ユニセフとユニセフ米国国内委員会は、これを国連で共同開催。世界中の推定130万の人たちがこの記録破りなクラスに参加。授業の内容は女の子を学校に入れる緊急性を示したものであった。

ユニセフは、さらに代表的出版物「世界子供白書2004」で女子教育について取り上げ、それがほかの開発目標の実現にどのように関係するかについても述べた。女子教育については、そのほかにも3冊の出版物で取り上げた：“Accelerating Progress in Girls' Education（女子教育をさらに促進する）”、“Rebuilding Hope in Afghanistan（アフガニスタンでの希望の再建）”、“Girls' Education, Making Investments Count.（女子教育：投資で成果をあげるために）”。

ユニセフはブータンで教員研修を実施し、ジェンダーに配慮した学校を30校建てた。小学校の女の子たちに教育を提供すると同時に、ユニセフとそのパートナーは、4,000人の中途退学者たちにも教育を提供している。このうち70%が女性である。チャド政府とユニセフが協働で実施している教育プログラムでは、10地区の女の子を対象に、学校に行っていない子どもたちを探し出し、就学させたり、ステークホルダーに支援を呼びかけている。これら10地区での女子就学率は全国平均よりも高くなっている。さらに、ユニセフは伝統的な酋長の集まりとパートナーシップを組み、早婚のように、女子の就学を阻む社会的、文化的バリアを克服すべく支援している。

ユニセフは学校でかかる費用をなくすキャンペーンを積極的に推進している。学校に費用がかかると子どもたち（特に女の子）はなかなか学校に通わせてもらえないからである。ケニアは、2003年に義務教育を無料にする方策をとり、そのおかげで就学率が急激に上昇した。

エンピツ、本、机、水とトイレ

水、衛生と衛生教育は女の子を学校に行かせるための重要な手段である。衛生設備が汚かったり、なかったりすると、すべての子どもたちが害を被るが、学校にトイレがな

かったり、非衛生的な環境であったりすると、一番の被害を被るのは女の子たちだ。家で容易に水を手に入れられない場合も、女の子たちは学校に行けないが、それは水汲みが女の子の仕事とされていることが多いからである。汚れた水がもとで繁殖する寄生虫が体の中に入ると、子どもたちの健康は蝕まれ、栄養、エネルギー、学習能力が奪われることになる。

ユニセフは、学校を中心とした水・衛生・衛生教育プロジェクトで、いつも強い存在力を誇っており、73カ国で支援事業を展開している。ユニセフは、「すべての人のための水と衛生（WASH）」、「学校衛生教育（SSHE）」、「学校での効果的な保健教育に投資する（FRESH）キャンペーン」において積極的に活動している。

タジキスタンでは、87,000人以上（うち半分が女の子）が、安全な飲み水、トイレ、衛生教育へのアクセスがある。その理由は、ユニセフ、教育省、農村部門が学校の衛生教育・衛生プロジェクトを支援したからである。ユニセフは、パキスタンにいる約80,000人の女の子たちのために、1,380本の手押しポンプを780校の女子学校（初等学校）に設置し、衛生教育を2,000人以上の教師たちに実施した。農村部の10万人の人々が安全な水源を確保し、女の子たちの水汲みの時間が減ったことで、女の子の就学率は急激に上昇した。汚れた水が原因で起きる病気もなくなり、学校への出席率も良くなったのである。





バングラデシュ： 約630万人の子どもが ミーナの話に夢中

ファティマは自分の年齢を知らない。いつ生まれたのか、親たちも良く分かっていない。家庭は貧しく、どちらも文字を読むことができない。それでもファティマには夢がある。エンジニアになりたいのだ。

10年前のバングラデシュならば、彼女の夢はかなわぬ夢であった。でも現在は、やる気さえあれば、ファティマの夢は実現する可能性がある。ミーナという頑張り屋のロール・モデルがいるからだ。

「ミーナのようにになりたい、だから学校に行きたいと両親に言ったんです」とファティマ。

ミーナは次から次へと障害を乗り越えている。そのひとつは女の子は学校に行く必要がないという価値観だ。ミーナは1990年代にユニセフによって作られたキャラクターだが、未だに人気キャラクターである。これはちょうどバングラデシュでの初等学校への女子就学率が30%も増加したときと一致する。もちろん、これがすべてミーナのおかげだとは言えない。教育面でのジェンダーの差別をどうにかしようとする政府の決意が、この増加を支える原動力となっている。「2005年までに25カ国を」運動に参加し、教育面でのジェンダーの平等を確保しようとしている25カ国のひとつバングラデシュは、政治的意思がどれだけの力を持ちえるかを表してくれているのだ。

初等大衆教育省とユニセフは、ミーナの人気をうまく利用して、人々の態度を変える努力をしている。バングラデシュでは約630万人の児童たちがミーナの話を読んでいる。ファティマが学校に通えるようになったこと、女の子の就学が増えていること、ナショナル少女サッカー・チームができたことから分かるように、昔ながらの偏見や制限は徐々になくなってきている。

ミーナは、男の子の態度にも良い影響を与えている。11歳になるオリは、ミーナの熱烈なファンだ。彼は、ミーナと弟のラジュがひとつの巣に2羽の鳥を見つける話を鮮明に覚えている。弟はどちらが女の子で、どちらが男の子だろうとミーナに聞く。すると、ミーナはこう答えるのだ。「そんなこと心配しなくてもいいの。両方とも飛べるようになるわ」



HIV/エイズの脅威を 克服する

HIV/エイズは若者の病気である。1,200万人近くの15歳から24歳までの若者が、HIVあるいはエイズと共に生き、15歳未満の子ども250万人が感染している。2003年度の新規感染者500万人のうち、半分以上が15歳から24歳までの若者であり、うち3分の2近くは女性であった。

この病気は、サハラ以南のアフリカの国々の一世代をすでに破壊し、もう一世代にまでその影響を与えようとしている。この地域では2003年度だけでも230万人がエイズにより命を落とした。さらに、2,660万人が感染し、1,100万人以上の子どもがこの病気により孤児となっているのである。HIV/エイズは、ほかの大陸にもその害を及ぼそうとしている。世界的には4,000万人がこのウィルスと共に生き、感染率はアジア、カリブ海諸国、東欧で激増している。このウィルスの広がりをくい止める必死の努力なしには、世界はかつてない災難を背負うことになる。そうなれば、戦争の被害や自然災害の被害とは、比較にならないであろう。

孤児世代を保護する

HIV/エイズが残した悲劇的な遺産は、終わりを見ない孤児人口の増加である。ユニセフは、UNAIDS（国連エイズ合同計画）と共に、この増大する危機に対処するための枠組みを開発した。2003年に、ユニセフは孤児と困難な状況にある子どもたちについて討議する「グローバル・パートナーズ・フォーラム」を召集した。これには50以上の機関から代表が参加した。フォーラムで、パートナーたちは世界的な対応を促進するために、この枠組みが価値のある貴重な道具だと認識したのである。

ユニセフにとって孤児のケアは最重要課題のひとつとなっている。2003年に、36カ国のユニセフ事務所で、孤児の保護とケアについての国家的な戦略が整備されているとの報告があがっており、別途32の事務所では、そうした戦略が整備されつつあるとのことである。ユニセフは、サハラ以南のアフリカの国々38カ国において、HIV/エイズにより孤児となったり、困難な状況に置かれている子どもへの支援プロジェクトを設けている。

ユニセフでは、孤児たちがコミュニティの中にとどまることを推奨している。とは言え、拡大家族による保護ネットワークが崩れてきているため、ユニセフや非政府組織、コミュニティ中心の組織などは、拡大家族に支援を提供することにしている。それは、カウンセリングから学校にかかる費用の負担にまで及び、子どもたちにとって拡大家族という保護的な存在がなくならないようにしているのである。

スワジランドでは、「ネイバーフッド（近隣）ケア・ポイント」が設置され、孤児のためのセーフティネットが確保されるようになっている。2003年に、ユニセフと世界食糧計画（WFP）は200カ所を支援し、子どもが世帯主の家庭や、そのほかの困難な状況にある家庭出身の6,500人の子どもたちが保健ケアを受け、栄養、心理社会的サービスを受けられるようにしている。ユニセフは、ザンビアで、「特別な保護を必要とする子ども」プロジェクトを通じて、いくつかの非政府組織を支援した。このプロジェクトでは、5,300枚の毛布と5万張の蚊帳が孤児とそのほかの困難な状況下で生活している子どもたちに配られた。また、危機的な状況

にある子ども6,000人に学校教材が配られた。

子どもの擁護者

ユニセフは子どもたちをHIV/エイズから守るために、全力を挙げて努力するよう呼びかけている。そのため、HIV/エイズが家族に及ぼす甚大なる被害について包括的に考察した冊子、「アフリカの孤児世代 (Africa's Orphaned Generations)」を発行した。そのほかにも、ユニセフはUNAIDS (国連エイズ合同計画)、カイザー家族財団、BBCワールド・サービス・トラストと共に、新しいウェブサイトを立て、データ、研究用ツール、マルチメディア・ツールを政治家、ジャーナリスト、学者、子どもの代弁者たちに提供した。<<<http://www.youthandhiv.org>>>

ユニセフ、UNAIDS、世界宗教者平和会議は、HIV/エイズについての冊子を製作し、宗教指導者たちがこの病気の脅威に対抗できるようにした。ユニセフとUNAIDSはまた、「アフリカのためのヨーロッパ会議」と「世界銀行議員ネットワーク」と共に、議員とそのほかの指導者向けにHIV/エイズについての冊子を作成した。

2003年に、南アフリカの「タカラニ・セサミ」の「カミ」がユニセフの「子どもの擁護者」のひとりとして加わった。HIV陽性のこのマペットは、この病気とともに生きる人々への理解を広げている。

予防が最良の薬

HIV/エイズを完治する方法はない。従って、これと闘うには唯一、予防という方法しかないのである。そして、それをもたらしてくれるのが知識という鎧だ。

HIV感染の約80%は性的感染に起因する。ユニセフは予防のためのABCを唱導している。それはAbstinence=禁欲=性的関係を結ばない、Being faithful=誠実であれ=一夫一婦制のような単一で誠実な関係のもとでのセックス、Condom=コンドームを常に正確に使用することである。

ユニセフはシエラレオネの国立エイズ事務局と合同で、国中の530人の宗教指導者を巻き込み、HIV/エイズについての情報が、宗教指導者の説教などにきちんと組み込まれるようにした。そして、予防についての小冊子を若い信徒たち4,000人に配ったのである。

ユニセフは、70カ国でHIV/エイズの母子感染予防のプログラムを支援している。ルワンダでは、2003年度にHIV陽性の母親の63%が抗レトロウイルス薬を受けた (2002年度は39.8%)。

インドでは、225のセンターの女性のうち60%が任意のカウセリングとHIV検査を受け、ウイルスに感染している90%近い母親たちが、新生児と共に抗レトロウイルス薬を処方された。

カンボジアでは、予防キャンペーンの一環として、ユニセフはHIV/エイズの情報を提供する2本の聴視者参加型のラジオ番組を提供している。女性たちによる非政府組織が製作した「赤信号、青信号」は、特にHIVとリプロダクティブ・ヘルス (性と生殖に関する健康) を扱っている。ユニセフとMobiTel (モビテル) 社は、1日約160件の問い合わせに対応するエイズ・ホットラインも支援している。

ベトナムでのHIV/エイズの報告件数は、2003年度に25%増えた。新規感染数のうち40%以上は、15歳から24歳までの若者であった。ユニセフは「仏教徒リーダーシップ・イニシアティブ」の立ち上げに寄与し、今では僧侶や尼僧が、寺院の活動にHIV/エイズ予防とケア・プログラムを導入している。

ユニセフは、仕事の間でもHIV/エイズ問題に取り組んでいる。スタッフによるスタッフのための短いビデオが製作され、全員が検査を受けるように、そして感染している場合は治療を受けるようにと広報している。

HIV/エイズに勝つ

HIV/エイズとの闘いを悲観するのはたやすいことである。しかし、くじけることを知らない強い意志があれば病気に打ち勝つことができることを、歴史は示してくれている。世界はすでに天然痘の脅威から逃れ、ポリオはそれに続くようとしている。治療方法の探求の中で大切なのは、きっと成し遂げられると信じることであろう。





「最初は親たちも躊躇しましたが、今では積極的に支援してくれます」

インドでのこと。学生と教師が性について話し合っている。話に上りにくい話題だが、学校ではあたりまえの光景となってきた。この国では推定460万人がHIV/エイズとともに生きているが、4分の1が15歳から19歳までの若者であり、感染を予防する方法を伝えることが急務となっている。

ユニセフとインド政府は、この流れを食い止めるためにチームを組み、学校を中心とした「エイズ予防教育プログラム」イニシアティブに乗り出した。責任ある安全な性習慣を身につけさせる授業が展開されているのである。従来の教科に、HIV/エイズの原因とリスクについての率直な話し合いを盛り込んだものだ。意思決定、同僚・友達からのプレッシャーに打ち勝つ方法などのライフ・スキルがプログラムの要となっており、科学、国語、そのほかの教科に取り入れられている。

「これらの授業では、ほかの人たちが教えてくれないようなことを教えてくれるんです」と話すのはアンジュマン・エ・イスラム女子学校のズルファだ。男の子との関係は慎重にならなければならないことを学んだという。

「必要なHIV/エイズの知識は得た」とヴィノッド。夜間学校に通う若い男の子だ。「病気から身を守って安全でいられる方法が分かったよ」

エイズ予防教育プログラムは500万人以上の学生に実施された。各地域の特性に合わせながら、このプログラムは次々と広がっている。

「最初は親たちも躊躇しましたが、今では積極的に支援してくれます」と語るのは授業を推進する科学の教師シーナズだ。「親は子どもにこういうことをなかなか話せませんが、そのギャップを私たちが埋めているのでありがたいがられています」



子どもたちを暴力と搾取から 守る

無数の子どもたちが毎日、暴力にさらされ、搾取されている。子どもに対する虐待は、表に出ることが少ないため、これがどれほどひどい状態になっているかを数量化することはできない。身体的、性的虐待は——それが家族の中であろうとも、ほかの場合であろうとも——秘密の扉の中で行われている状態だ。

売買春やポルノ業界に巻き込まれている子どもの数は推定200万人と言われ、約1億8,000万の若者が最悪の形態の労働に従事させられている。また、毎年約120万人の子どもが人身売買の対象となり、570万人が債務労働そのほかの奴隷形態の労働に従事させられているのである。ユニセフとそのパートナーは、この問題の大きさを表に出し、実証する断固たる決意を持っている。ほかにも、子どもの虐待を防ぐ、子どもに優しい保護環境をも推進している。具体的には、通学率の向上、子どもを搾取する側を罰する法律の制定、子どもの保護を実行する政府、子どもが直面するリスクを感知できるコミュニティの増加、こうした問題を取り上げるマスメディアの増加、汚職・腐敗のない警察や法施行機関の増加などを目指すものである。

ユニセフは宗教的倫理に基づいた社会活動をする組織と共に、サハラ以南のアフリカの孤児たちを保護し、カリブ海地域では体罰を根絶するべく努力を払っている。中央ヨーロッパ、中東、南アジアでは、非政府組織と協働して、施設でのケアを改善し、子どもを対象にする性産業を解体し、子どもの危険な労働をやめさせる努力をしている。子どもたち自身もユニセフと一緒に、こうした悪質な行為をやめさ

せる活動に参加し、公衆の前で正堂堂と意見を述べ始めている。メキシコでは児童相談所に対して、およそ300万人の子どもたちが暴力と差別についての証言を行い、ラオスでは、子どもの権利についての研究に子どもたちが積極的に関わった。

ユニセフは、親の保護下にいない子どもたち（勾留・拘留中の子ども、養父母のもとにいる子ども、ケア付き施設、孤児院にいる子どもなども含む）の保護についての国際ガイドラインに則った国家基準が作られるよう、政府を支援している。人身売買、性的搾取、強制あるいは債務付き労働、子どもの兵士の登用を根絶するための、法的、実践的方法を開発するよう、国を説得しているのである。ユニセフは、子どもに対する身体的、精神的暴力（それがたとえば家族の中、コミュニティの中、学校や施設の中であろうとも）を削減できるよう、プログラムや支援の策定、資金助成、実施面での助言も行っている。

最悪の形態の児童労働

「児童労働」という言葉で、人々は往々にして、子どもが劣悪な環境の縫製工場で労働している姿を思い浮かべる。ところが、児童労働には人身売買、売買春、ポルノ、武力紛争への参加なども含まれているのである。ユニセフは、こうした虐待を表面化させ、この種の犯罪をなくすために最前線で努力してきた。1999年に採択された最悪の形態の児童労働を禁止する国際労働機関（ILO）の第182号条約の批准を呼びかけ続けているのだ。批准国数は、ユニセフが中期戦略計画を開始した当時の113カ国から、今では147カ

国まで増加している。政府が子どもの人身売買に関する公的な宣言を行っている」と報告してきたユニセフ現地事務所数は、2003年には80カ国に上っており、これは2002年の64カ国から比べても25%の増加となっている。

アンゴラでは、ユニセフの支援を受けて、ハイ・リスクな国境ポイントや空港で、縁戚関係にない子どもを連れてくる人をチェックする体制を確立した。フィリピンでは、コミュニティを中心とした人身売買の防止教育を通して、親、ボランティア、教師、非政府組織のリーダー、地元の役人を動かし、人身売買防止法の通過を促した。ユニセフとそのほかの子どもの権利の唱導団体は、需要面から子どもの性的搾取についての問題に取り組み、「顧客」（その多くがヨーロッパや米国の人たち）を罰したり、起訴するよう政府に働きかけた。

武力紛争下の子どもたち

戦争で一番の被害を受けるのは子どもたちである。兵士として殺されたり、難民として故郷を追われたり、地雷によって体に障害を負ったり、混乱の中で家族とはぐれたり、親が死亡したり、誘拐されたりして家族と離れ離れになってしまう。ユニセフは、子どもの権利がおとなの敵対心や暴力によって剥奪されるべきものでないことを知っている。

ユニセフとそのパートナーは、「武力紛争における児童の関与に関する児童の権利条約選択議定書」の批准を重要課題として推進している。2003年には、「Coalition to Stop the Use of Child Soldiers（子どもの兵士禁止のための世界連合）」とユニセフは、「武力紛争における子どもの関与に関する選択議定書についてのガイド」を製作した。ウガンダでは、しかし、未だに子どもの兵士がLRA（神の抵抗軍）によって登用されており、ユニセフは誘拐後に解放された子どもたちを収容する8つのセンターで、2003年に、再定住キット、職業訓練、保健ケアを3,500人に提供した。

アフガニスタンで、ユニセフは学校外教育と職業訓練、ライフ・スキルを元子ども兵士たちに提供し、20年以上続いた戦争により影響を受けた子どもたち全員が学校に行けるように、学校の再開を支援した。グルジアでは、非政府組織であるゴールデン・フリースを支援し、国内避難民の子どもたちにコンピュータ講座を開設し、レクリエーション活動ができるように支援した。国内避難民の若者たちにも研修を実施し、ほかの子どもたちに、子どもの権利と子どもの権利条約について教えられるようにした。スリランカでは、「タミル・イーラム解放の虎」から解放された子ども兵士たちがコミュニティに円滑に同化できるよう、一時

滞在センターを設置した。

1万から2万人の子どもたちが、兵士として、あるいは性的目的や雑用目的で登用されたりベリアでは、子どもの兵士たちに必要な情報を提供するにはどうしたら良いか、避難民の若者たちが広報の仕方を模索した。コロンビアでは、若者を演劇セラピストとして研修。心理学者の指導のもと、10代の若者たちが、子どもの兵士として登用されていた子どもたちと一緒に作業をし、不寛容の心と残酷行為が次の世代に引き継がれないようにしている。





「イニシアティブの最大の強みは、彼らに所属意識を持たせることです」

父親が銃を持った兵士に殺された後、5人きょうだいのうちで一番小さいジョセフはすぐにストリートチルドレンになった。たった9歳で、彼はわずかなお金を稼ぐために土埃の道に立ち、車の窓を拭く仕事に就いた。食事代が稼げないときは、物乞いするしかなかった。

「路上で働いてお金を稼いだんだ」とジョセフ（現在11歳）は言う。「学校には行ってなかった」

ジョセフはジャマイカにいる2,800人のストリートチルドレン（主に男の子）のひとりだ。その子どもたちの多くは社会サービスを受けることができないままにいる。1996年の開始以来ユニセフの支援を受けている「ストリートチルドレンのための国家的イニシアティブ」は、7歳から14歳の厳しい生活を強いられている子どもたちのために強化された。目標は、傷ついた彼らの自尊心を癒し、社会の主流に引き戻すこと。そのためには学校に行くことができるようにすることがまず大事である。

このイニシアティブでは、補習教育、コンピュータ、音楽、芸術、工芸などの教室を開いており、子どもたちに朝食と昼食、医療・歯科ケア、衛生教育を提供している。国語と算数の学力が同年齢の子どもたちと同じレベルに達すると、子どもたちは、通常の学校教育を受けることができる。

「イニシアティブの最大の強みは、カウンセリングを通して子どもの自尊心を育てることです」と語るのは23歳のスタッフ、カティアン・ドナルド。「そうやって、所属意識を持たせ、家族と再会させてあげるんです」

ユニセフはイニシアティブの一環である「家族との絆」において、親たちに対するカウンセリングやトレーニングを行っている。また、就職にも力を貸しているが、家族の貧困が子どもたちをストリートチルドレンにしてしまう主な原因であることを考えると、これは必須のことだと言える。

ジョセフは、自分が家に帰り、読み書きできるようになり、「いいマナー」が身につき、学校に戻ることができるようになったのはイニシアティブのおかげだと思っている。かつて、彼の目標はただ1日、1日を生き延びることであった。それが、今日では、学校を修了できるよう一生懸命勉強している。そう、いつの日か仕事に就けることを願っているのだ。